

---

# 散歩

あきくん

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

散歩

### 【コード】

N8537B

### 【作者名】

あきくん

### 【あらすじ】

”少し不思議”の略のSFです。どこまでも散歩する、そんな話です。

## 散歩

老人がいつものように散歩をしていると、いつものように若い男女が話をしているところが見えてきた。彼らが話をするようになったのはいつのことだろうか。

散歩。老人にとってはその単語が正しい。しかしそれを、ウォーキング、と呼ぶ者もいる。どこが違うかといえば、ウォーキングのほうが運動のように感じるが、老人にも若い男女にもよくわからない。同じものなのかもしれないし、厳密には違うものなのかも知れない。ただ、どちらも歩くということには違いはないとは理解している。好きに使えばいい。

男の場合は散歩、女の場合はウォーキング、老人の場合は散歩。彼らはそう決めている。言い方に違いはあるが、彼らはそれぞれ毎日同じ時間に同じ道を通って歩く。そしてそれぞれに歩く理由がある。それらの点では同じだ。

男と女は毎日同じ時間に橋の前ですれ違い、それぞれが歩いてきた方に消えていく。老人は彼らがすれ違うところを、毎日同じ時間に橋の中央付近で見る。そんな状況がしばらく続き、それが三人にとつてのいつもどおりとなった。

それからしばらくたつと、いつのまにかその場所で若い男女は会話をするようになっていた。散歩をしているのだから、それを妨げない程度の二言三言の会話だ。老人は橋の中央付近よりやや彼等に寄って、その二人を見るようになった。いつか二人いっしょに歩いているところを見てみたいものだ、そう思うようになっていた。これがいつもどおりとなった。

いつもどおりがどれだけ続いていたときだろうか。この日も、男はいつもの時間いつもの場所でいつものように女と出会い、軽い話をした。それを老人が見、そして男はいつものように女のきたほう

に歩いていき、塀にぶつかってとまっているトラックの巨大なタイヤの下に、先ほどすれ違った女と同じ服を着た同じ顔の女を見た。男に恐怖はなく、ただいつもどおり歩いて家に帰った。

次の日も男はいつもの時間に散歩に出た。

昨日見たものは何だったのだろうか。幽霊か本人か。本人か別人か。そんなことを考えながら歩いた。そして、いつもの場所で女に会った。そして会話をしすれ違う。別に怖いことはない。いつもどおりのことだ。何の不思議もない。もちろん老人もいつもどおり見ていた。それからも三人は同じように過ごした。

しかし男は考える。いつまでもいるべきではない。

それから二人の会話は少し長くなり、そのぶんだけ老人は少し二人に近づいた。これがいつもどおりとなった。

その日女と会ったときに男は切り出した。

「君は何のために散歩をしているんだ？」

「何のため？」

「そう目的があるものだろ？」

「それじゃああなたにはあるの？」

「えっ、はじめは体力作りのためだったけど、今は日課かな」

「そう。わたしもそんなかんじかな」

「それでもいつか終わりはあるんだよ」

「でもあたりまえのことだからわからなくなっているのね」

「君はどうして毎日くるんだ？」

「いつものように、あたりまえのことよ。あなたは？」

「同じだよ。けどいつまでも続けることじゃない。今こうして長く話していることだって、今までなかったことじゃないか」

「何が言いたいのか？」

「変わるんだよ。いつまでも同じとはいかないんだ」

「わかっているのね」

「君はわかっているじゃないか」

「わかっているわ。あたりまえのことだからって、あたりまえのま

まじやいけないことだつてあるのよ」

「じゃあ何でここにいるんだ？」

「それはあなたよ」

「なにを……？君は、君はここにいてるべきじゃないんだ」

「それはあなたでしょ。あなたは……もう死んでいるのよ？あなたのいつもどおりは終わったのよ……？」

「……それは君だよ。僕は見たんだ。君の……死体を……」

「えっ……。でも私も見たのよ。あなたの死体を」

「えっ。その日から君はいつものように来て、いつものように……」

「あなたもそうだったのよ……」

老人が近づく。彼らの長い会話が老人に橋を渡りきらせたのだ。

「お嬢さんが一日早かった。わしはそれからも見てきたよ」

「あなたは？」

「同じようにいつもどおりの散歩仲間じゃよ」

「私たち二人とも死んでいると言うんですか？」

「ああ、そうじゃ。じゃが、いつもどおりいたときはうれしかった。

何も怖くなく、当然だと思つたものじゃ」

「あなたもですか……」

「私もそうでした。あたりまえのことで、何も疑問はありませんでした。でも私が死んでいたなんて……。いつもどおり来ていただけなのに」

「僕も何も変わったことはなかった……」

「だが真実を知つて、なおいるというのはどういうことじゃ？」

「ずっと繰り返すのかしら。ただ歩くことをあたりまえに繰り返して」

「自分でも止められないのか……」

「なぜ？今は違う。こんなに長く話し、しかもわしがいる。これはいつもどおりのことではない。そうではないのか？いつもどおりは終わったんじゃないよ。それなのに……。他に何かあるんじゃない

のかね？」

「わかりません・・・」

「私も・・・」

「理由はあるものじゃよ。ただそれに気づかないだけじゃ。いつもどおりに隠された本当の理由にな」

「あなたにはあるんですか？」

「歩くことが目的じゃてな。若い者とは違う。ふおふおふお」

「知っているんですか？」

「むう・・・。わしが思うに、会うために来とつたんじゃないかね？」

「えっ・・・」

「少なくともわたしにはそう見えた・・・」

「・・・そうかもしれない。僕は君に会うために歩いていったんだ」

「わたしも、あなたに会いたくて・・・」

「わしは前から二人一緒に歩くところを見てみたかった」

二人は同じ方にいった。

老人の散歩はまだ続く。新たな楽しみを探して。

了

(後書き)

20070419

読んでくださった方に感謝いたします。

この話は別の”忘却”という話の言わば親戚のようなものです。のような、というのは共通点がいかに多くても他人であるということです。解りにくいかもしれませんが、それは間違い無くわたしのせいです。

これは題名のとおり、ずっと散歩していくという変わらない話です。変わっても変わらないことはあるんです。・・・きっと。感想を頂ければ幸いです。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8537b/>

---

散歩

2009年5月29日23時52分発行